

故馬原鉄男先生追悼号の刊行にあたって

経済学部長 坂野光俊

1992年7月2日、私達の敬愛する同僚、馬原鉄男先生が急性心不全で逝去されました。享年61歳。誰もが予想だにしなかった、本当に急な旅立ちでありました。残念至極、痛恨の極みであります。ここに馬原鉄男先生追悼記念号の刊行にあたって先生の経歴のご紹介を兼ねて、一言御挨拶申し上げます。

馬原先生は、昭和5年(1930年)に宮崎県の高千穂町でお生まれになりました。中学校卒業後、先生は、教職への道を志し、太平洋戦争末期の昭和20年4月に宮崎師範学校予科に進学し、3年後に本科に進まれました。学制改革で宮崎師範は宮崎大学学芸学部となりましたが、その中学社会科課程を昭和26年に修了し、同時に地元の三ヶ所中学校で社会科の教鞭をとられることになりました。2年9カ月の教員生活の後に、先生はより一層の日本史の研究を志して、本学立命館大学文学部日本史学科の3年次に編入学し、2年間の勉学を終えると同時に社団法人部落問題研究所の専任研究員として就職するとともに大学院に進学、学究生活の道へと歩み出されました。

大学院に籍を置きながら、研究所という職場で活動された1956年4月から1963年3月まで、先生の25歳から32歳までの7年間に、先生は精力的に研究、調査、執筆活動をされて、その後の部落問題研究の第一人者としての基礎を築いていかれました。大学卒業の1956年、25歳の若さで学術誌「日本史研究」に「自由民権運動に置ける玄洋社の歴史的評価」という秀れた研究論文を発表し、関係者の注目を集められました。この時期の先生のご活躍の一端をご紹介しますと、東洋経済新報社の「日本近代史辞典」や河出書房新社の「日本歴史大辞典」に日本近代史に関連した諸項目を分担執筆、三一書房発行の講座「部落」

に「部落の現状」、「部落の人間像」等の論考を執筆、また平凡社の「日本残酷物語」や河出書房新社の「図説・日本庶民生活史」に虐げられた庶民の生活の歴史について執筆されました。また、「解放への闘いと教育」という最初の著作も出版されております。こうした著作・研究活動によって新進気鋭の研究者として名を知られるようになっていきました。

先生32歳の1963年の4月に大阪工業高等専門学校の専任講師に迎えられ、翌年には助教授、40歳の1971年6月に教授になりました。大阪工業高専では、「歴史」、「経済」、「法制」等の科目を担当されました。32歳から47歳までの大阪工業高専時代の先生は研究者・教育者として、また社会活動家として、最も活躍された時期で、主著の「日本資本主義と部落問題」を始め、「水平運動の歴史」、「部落問題の歴史」、「現代日本の部落問題」等の著作を次々に執筆されるのみならず、三重県松阪市、京都府教育庁、京都市民生局等の諸機関からの委託を受けた同和地域の実態調査を精力的に実施され、更に歴史学研究上の方法論に関する専門論文を学術雑誌に多数掲載されました。また、先生は、この時期に本学の理工学部や文学部で非常勤講師として教壇にたたれ、本学の教育にも御尽力いただきました。更に、先生の活動は研究・教育に止どまらず、全国部落問題研究協議会事務局長、国民融合をめざす部落問題全国会議常任幹事等の社会的活動にも参加されました。まさに、超人的な働きでございました。

立命館大学経済学部が先生を専任のスタッフとしてお迎えしたのは、1980年10月、先生49歳の時でした。先生の専門の担当科目は、教職課程関係の同和教育や社会科教育法でしたが、それらの全学共通的な科目のほかに、経済学部の1回生基礎演習、3・4回生のゼミナール等の経済学部の固有の授業も担当して頂きました。それらの授業における先生の情熱溢れる授業態度は多くの学生諸君に多大の感銘を与え、授業を受けた学生達の偽らざる声として、私達の耳に届いてきました。

先生はまた、研究・教育活動のみならず、大学行政についても労を惜しまず精魂込めて努められました。1986年度には経済学部の主事、その翌年の1987年度には人文科学研究所の部落問題研究室長を、そして引き続いて1988年4月か

ら1990年度までの3年間は立命館高等学校・中学校の校長として、また学校法人立命館学園の理事として、学内の重要な役職を歴任されました。また、1984年度には人望を集めて本学園の教職員組合委員長に選出され立派に職責を果たされました。

こうして先生のご活躍の跡を振り返ってみますと、先生が如何に研究と教育に情熱を傾けられたか、如何に誠実にその職務を遂行されたのかを、今更ながら実感させられます。同時にまた、私達は如何に大切な方を失ったかを痛恨の思いを伴って認識させられます。

この追悼号には、10月16日に経済学部主催で開催しました馬原鉄男先生追悼講演会での杉之原先生の講演や諸先生の追悼の言葉が収録されております。本号の読者の皆さんはあらためて先生のご業績の偉大さと温かいお人柄を知ることができると思います。特に、学生諸君には馬原先生の秀れた研究活動と誇るべき生き様について学んでいただきたい。そして経済学部の教員にこうした立派な先生がおられたことに誇りをもって学生生活を送ってくださることを、また先生の遺こされた仕事を引継いで下ださる方が一人でも多く現れることを期待致しまして、馬原先生追悼記念号刊行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

1992. 12. 1